

# 蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館

外山

徹

## 吉宗と六代藩主宗直



王子権現の縁起と吉宗による飛鳥山周辺の景観整備を記す碑文

八代將軍吉宗と言え「質実剛健」「質素儉約」が看板で、実利一辺倒な人物と思われがちだが、意外な側面のあることを紹介しておきたい。

吉宗は就任早々に五代綱吉が廃止した鷹狩を再開した。鷹狩は軍事演習であるとともに、民情視察としても評価されているが、吉宗も新將軍としてその権力基盤をなすところの江戸の周辺地域へ精力的に出かけて行った。

### 飛鳥山の碑

さて、東京都北区の飛鳥山公園には縦二〇六センチ・横一八二センチという巨大な岩に石刻された「飛鳥山の碑」と呼ばれる石碑がある。元文二年(一七三三)閏十一月二日、王子権現(現在の王子神社)の別当金輪寺有衛の名によって建立されたものである。

その文面は川柳で「擲されるくらいに難解極まるもののだが、碑文は

王子権現の縁起と、將軍吉宗との関わりについて述べている。雰囲気も味わっていただきたいので、この際、訳出の巧拙は顧みずその一文を引用してみる(原文は漢文)。

### 車駕之肇從紀蕃來也

「車駕」とは最高位の人物が乗る乗物のこと。「はじめて紀藩より来るなり」なので、吉宗が紀州から来た当初という意味になる。

### 有司行邑吏審谿谷道

#### 泉瀑

「有司」は官吏、この場合は幕府の役人が「邑吏」すなわち村役人に行わせた。溪谷を審(透)い、泉瀑(滝)を作らせたという。

### 畧碯畧澗而旋

「畧碯」とは「大漢和辞典」によれば「水が石に激して平らかでないさま」とのこと。「碯」は磨かれた石の意味なので水流に岩が洗われている様を表し、「澗」は「旋」は意味が重複するが、川の流れの渦巻いている

様子ということだろう。すなわち、飛鳥山の北端を流れる石神井川の川浚いをして景観を整えたことを述べている。

### 乃植花木数千株

「花木」はすなわち桜であり、前段で往古より熊野三所権現に春の花を供える慣わしがあったことが述べられている。つまり、王子権現に祭祀されている熊野三所権現に対する供花として桜を植樹したということである。

これはどういふことかと言うと、享保五年(一七二〇)八月に吉宗が鷹狩で近辺を訪れたところ、生国紀州の神である熊野三所権現が祭祀されていることを奇遇に思い、石神井川を熊野の音無川になぞらえて整備することを命じ、さらに、江戸城吹上から桜の苗木二七〇本を飛鳥山に植えさせたというものである。さらに翌年には二〇〇〇本を追加で植樹している。供花もさすが將軍のやることとなるとスケールが大

植樹された飛鳥山は桜の名所となり、庶民にも花見の場所として開放された。吉宗は他にも隅田川堤への桜・桃・柳の植樹や中野の桃園など、近郊における遊園の整備をおこなっている。冒頭に述べた通り、吉宗は堅物で神仏の祭祀や花見などの行楽には無縁に思われそうだが、実際にはそうでもなかった。こうした施策はおそらく民心の安定を意図したものであったのだろうが、儒教的な思想からすると、それ自体が君主としての責務と考えていたのだろうか。

元文二年(一七三三)

三月、吉宗は王子への猪狩りの途上、飛鳥山を王子権現社領として寄進。碑の建立の契機となった。碑を建てた有衛は元高野山の学僧で吉宗の知己でもあった。文面は成島道筑の撰で、作成にあたっては吉宗が直々に目を通して、内容について指示をしたと言われる。

### 六代藩主宗直

さて、吉宗転出の後、和歌山藩も新たな藩主を迎える必要があった。藩である西条松平家の藩主頼致が第六代和歌山藩主を継ぎ徳川宗直と名を改める。この宗直こそが高尾山と紀州家との関わりを始めとなる藩主であるが、そのことについては追って話を進めたい。まずは、宗直の来歴について見てみよう。西条藩は三万石の小藩であった。父頼純の時に分家しているの、宗直にとって紀州の地は全く未知の土地であった。

宗直は享保三年(一七一八)四月に初めて御国入りを果たし、精力的に領内を巡見した。藩政初期の事績として、熊野三山の堂宇修築がある。熊野三山は浅野長晟と初代頼宣による堂宇宮繕があったが、それ以降は藩財政再建の最中でもあり、手当も行き届いてい

なかつた。この度の修築が決まったのは將軍吉宗の後押しがあったと言われるが、ちようど飛鳥山に植樹がなされたのと同じ頃である。江戸にて飛鳥山の王子権現を拝した吉宗は、故郷紀州の熊野三山が気になったのにはあるまいか。修築費用を募る勸化が享保六年(一七二二)から始まり、將軍家の家族、紀州家、家中がまずそれに応じた。修築の完了までには一〇年の歳月を要し、同一六年、遷座式典がおこなわれた折には吉宗から太刀と目録が奉納された。この吉宗の神仏への崇敬ぶりは宗直にも影響を与えたと言われる。宗直は紀伊国二之宮である日前宮と和歌の浦東照宮の鳥居を再建、菩提寺長保寺への法華経奉納や領内旧社の再建などの事績を残す。

その藩政の当初は幕令に従って儉約令こそ布いていたが、吉宗時代の蓄財により財政は安定して

いた。しかし、享保一七年の蝗害は深刻で、以降不作の年が続き、再び財政の窮迫はまぬかれず、製材・炭焼きなど林産資源の開発や人参栽培、ハゼの実による製蠶など商品作物栽培の振興に努めた。宗直は領内各所に救恤拠点や設け領民の救済に尽くすが、民の暮らしの安定を統治者の責務とする儒教思想の影響が強かったと言われる。

実は宗直の思想的背景の形成に関わる重大な事件があった。父頼純は嗣子頼雄を廃嫡して五男である宗直を後継とした。父の勘気を蒙ったというのは表向き理由で、藩士にも人望が厚く正室の子であった頼雄を退けた理由として、宗直の母於由利の方への寵愛が指摘されている。

りその扶持を受けていることを知った頼雄は食を絶つて自死したとも、それは表向きの理由で実は宗直によって暗殺されたとも言われている。はつきりしていることは、頼雄の廟所が整備され歴代の藩主が懇ろに祭祀に努め、後には嫡子としての復権もなされていることである。封建の世においては実父の意向に異を唱えられるものではない。また、頼雄自身も廃嫡を従容として受け入れていたわけである。それから考えると、宗直自身は兄の廃嫡とその死を忤怩たる思いで受け止めていたのではないだろうか。宗直の寺社への崇敬の背景として、見逃しにできないエピソードだと思ふ。宗直は長命を保ち、宝暦七年(一七五七)に逝去。藩主としての在位は実に四一年の長きにわたった。

《参考文献》小山譽城「徳川將軍家と紀伊徳川家」(清文堂、二〇二二)